

こころの玉手箱



日だ嵐のときと嵐の日だ
嵐が降ろうと必ず店を開ける

「待ち」の商売。客を呼ぶために花をどう並べれば奇麗に見えるか、花束を酔客にさっと渡して売るには、いく

六本木の花屋「フローリスト・マグ」

大学時代、東京・元麻布にある6畳1間の木造アパートに住んでいた。風呂がなく毎日近くの麻布十番温泉に通った。夏場など、汗をかく度に一日に二度三度と通うのも珍しくない。最高のぜいたくは風呂付の部屋に住むことだと思った。東京で浪人時代を経験し、両親に苦勞はかけまいとアルバイトを幾つも掛け持ちした。3人の小学生の家庭教師から相撲観戦のゴミ拾いまで何でもした。

一番思い出深い経験は六本木の俳優座劇場の真向かいにあったスーパーの軒先にある花屋「フローリスト・マグ」での4年間だ。マグはいまや六本木のと真ん中に店舗を構えるが、当時は、一坪もない小さな露天の店だった。マグの営業時間は、午後4時から深夜2時頃まで。雷が降ろうと嵐の日だろつと必ず店をオープンする。仕事と向き合う真摯な姿が六本木に暮らす人や夜のお店で働く人に静かな感動を振りまき、信頼を勝ち得た。どんな時でも必ず開いている絶対的な信頼感と圧倒的な競争力が、周りの街からもお客を呼び寄せた。花屋はいわば「待ち」の商売。客を呼ぶために花をどう並べれば奇麗に見えるか、花束を酔客にさっと渡して

「笑」って「売」る 商売の極意

らくらいのものを何種類用意すればいいか、頭を使い続けた。日給は5000円程度で時給にすれば僅か500円だったが「笑」って「売」る商売の楽しさは何物にも代えがたかった。

マグの店主の池内潤二さんのことはジュンちゃんと呼んでいた。ジュンちゃんから常々「お前もな、いずれは一国一城の主になれよ」と言われた。卒業後、サラリーマンではなく商売をしようと考えた僕はジュンちゃんに弟子入りをお願いした。ジュンちゃんは花屋はいつでもやれる。社会経験を積んで、それでも花屋をやりたいになったら面倒を見るから俺の所に帰ってこい」と言ってくれた。

早稲田大学の友人皆が一流企業に就職する中、僕一人だけ3年間の契約社員として、現在のあいおいニッセイ同和損保に入社を決めた。保険ディラーの会社を起業して、ジュンちゃんを「あっ」と驚かせようと心に決めたからだ。